

研究発表要旨

‘Agamemnon Class 1939’ を読む

岡野浩史

‘Agamemnon Class 1939’ は Iris Murdoch の学友であり恋人にも近い存在であったが第二次世界大戦時24歳で戦死した Frank Thompson に捧げられている。この4連79行から成る詩を極力マードックの思いに近いところで受け止めるためには表面の字句だけでなく、その背後にあるものも読み解かなくてはならない。

この詩の十全な理解には劇『アガメムノン』の内容及びその背景（トロイ戦争）のみならず、主人公アガメムノンの家系についての知識が不可欠である。Zeus の子 Tantalus に始まる、その家系では infanticide, cannibalism, murder, adultery, incest などがアガメムノンの代になるまでに繰り返されている。彼自身も娘を殺している。さらに彼の死後にはその息子による matricide がある。悪事の連鎖が続く呪われた家系である。

第1連では、戯曲を読んで、それまでの自分たちの常識や思い込みがことごとく破壊され、過去の体験が無意味と化す様子から描かれる。『アガメムノン』ならではの衝撃である。そして時は1939年。戦争に対する不安をのぞかせながら、魂について以下の記述が出てくる。

With exquisite dressage / We ruled a chaste soul.

‘dressage’ とは special art of riding a horse の意で馬術の用語である。魂を語るのに馬術を用いるのはプラトンの流儀である。彼は魂を天駆ける2頭立ての馬車と御者に見立てて論じている (Phaedrus 246-247)。そこでは翼ある2頭の馬は白い方が血統のよい馬（善）、黒い方が血統の悪い馬（善ならざるもの）で、それらを御者（ロゴス）が操っている。‘exquisite’ が効いている。すぐあとには以下の行が続く。

They had not yet made an end / Of the returning hero.

‘They’ は何か？ ‘returning hero’ がアガメムノンだとわかれば ‘They’ はその妻 Clytaemnestra と妻の愛人 Aegisthus（アガメムノンの従弟）であることに気が付く。これは戯曲の内容である。この2行により読む者は一気に『アガメムノン』の授業の現場に引き戻されると同時に戯曲の緊迫した空間に連れていかれる。極めて技巧的である。

第2連は次の1行で始まる。

Heralded by the cries of hitherto silent Casandra

Casandra は予言の神アポロに愛された悲劇の予言者でトロイ王 Priam の娘である。アガメムノンは戦利品とともに彼女を連れ帰った。劇中ではクリュタイムネストラに殺される直前まで彼女は馬車の中にとどまり沈黙を守るが、突然狂ったように叫び出し、アガメムノンの死や自分の死を予言した後、宮殿内に入り、殺される。このようなカサンドラが第1行に登場した後にドイツ軍の空爆による the London Blitz 時の描写が続けられる。この1行は第2連の内容を展開する上できわめて効果的な導入となっている。空襲のもたらす惨状が淡々と描かれ、カサンドラの影のもと、神の死で第2連は終わる。

第3連は以下の1行で始まる。

Delphi medises and Apollo’s face grows dim.

medise とは OED によれば to sympathize with or favour the interests of the Medes or Persians の意。この1行はペルシャ戦争時のデルフォイの神託のことを言っている (Herodotus: *The Histories* Book 7 Chapter 140-144)。アポロの神託もじつは政治の道具にすぎない。戦争に無関心な現在の若者、戦争で死んだ過去の若者が言及されたあとに以下の行が来る。

Even grief dates, and even Niobe / At last was fed,

子を失ったニオベはしばしば悲しみの象徴とされるが、この行自体は *Iliad* から来ている (Book 24 ll. 699-727)。Achilles に長男 Hector を殺されたプリアモスはその遺体を引き取りに来て、アキレスと対面している。アキレスは自分がまもなく死ぬことを知っている。その時は自分の父親も目の前のプリアモスのように悲しむだろう。老王は自分の息子を殺した男を前にして何も食べられず悲嘆にくれている。二人の間にあるのは憎しみではなく深い悲しみである。反戦文学『イーリアス』の痛切な山場である。トロイの北方300kmのトラキアで死んだフランク・トンプソンとアキレスが重なる。

第4連はわずか9行から成り、以下の3行で始まる。

No one can rebuild that town / And the soldier who came home / Has entered the machine of a continued doom.

この3行はアガメムノンが、あのおぞましい、延々と続く呪われた家系の運命から逃れることができなかったことを言っている。彼を 'the soldier' として兵士の運命一般への示唆もある。以下には太古のギリシャから現在までを意識させる記述が続き、人類全体もまた呪わしき戦争の呪縛から解放されていないことがアガメムノンの運命と重ね合わせて暗示される。そしてギリシャの明るい空が薄れて消えていき、詩は終わる。起承転結の明快な美しい結構に死者への祈りが込められている。